デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2018年（平成30年）12月7日（金曜日）（3）

「アートに関心高い地域」

魅力再発見 外国人から見たキタオウウ

デンバー・ガルザさん＝フィリピン

八戸に1カ月滞在、文化交流

デンバー・ガルザさんと「南郷アートプロジェクト」で制作した自身の作品＝10月、八戸市

フィリピンのマニラを拠点に活動しているアーティストのデンバー・ガルザさん(31)は、10月初旬から約1カ月間、八戸市に滞在した。地元の文化や人々と触れ合いながら、臨床心理学などを学んだ経験を生かしたワークショップを展開。「たくさんの人と出会い、とてもいい刺激になった」と振り返る。

拠点地以外の場所に一定期間住むことにより、新たな創作活動に生かしてもらおうと、八戸市の民間団体「AIR−H（エアーエイチ）」（代表・東方悠平八戸工業大講師）が招聘（しょうへい）した。

ガルザさんは現地の大学で心理学を、大学院では臨床心理学を専攻。クライアントが作った絵画や造形から、何を表現しているかを読み取り、心のケアに役立てる「アートセラピスト」として、地元の病院で勤務した経歴を持つ。

現在、さまざまな素材を貼り合わせたコラージュや自作の絵、写真などを一つの冊子にまとめる手法「ZINE（ジン）」を中心に、制作活動をしている。

八戸に滞在中は、地元の学生らを対象にワークショップを開催した。自分自身を見詰め直すことがテーマ。参加者には、利き手とは反対の手で描いた絵を通じての自己分析や、リンゴを題材にした小冊子作りに挑戦してもらった。

「南郷アートプロジェクト」にも参加し、作品を制作。市中心街の「横丁」の魅力を発信するイベント「酔っ払いに愛を」で披露されたアートパフォーマンスを見学したほか、十和田市での音楽イベントに参加した。ガルザさんは「アートに対して関心が高い地域だと思った。機会があればまた戻ってきたい」と語った。

（玉川那津美）

お気に入り

縄文文化の魅力を発信する八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

メッセージ

土器のデザイン性に感動

異国の地に住んでアーティストとして活動するのは不安だったが、周りの人たちが温かくて、すぐに溶け込めた。大き過ぎず、小さ過ぎない街の規模も良かった。加えて、食べ物がすごくおいしかった。新鮮な魚介類と日本酒の組み合わせが最高だった。

滞在中、特に感動したのは、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館を訪れた時。土器や土偶からは宗教的、かつスピリチュアルな何かを感じることができた。大昔の人々が、デザイン性のある土器などを作っていた事実は、シンプルにすごいことだと思う。